

はじめに

1 年間に渡って学習者コーパスを用いた英語教育における研究・教授への応用を考えてきたが、最終回はその問題点なども含めて、学習者コーパスの今後の活用の可能性をまとめておこう。

学習者コーパスの応用可能性

1年間で紹介したものも含めて学習者コーパスがどのような分野へ応用可能かをリストとして挙げてみよう。私見では、英語学習者コーパスは本格的に整備が進めば、英語教育の根幹を変える可能性を秘めている。第1に教師の側からの教育や指導のベースになる「英語学習者がどう英語を学ぶか?」を徹底理解できる(言語習得段階モデルの検証)、第2に英語教師の置かれている環境を整備する部分が変わる(言語教育システム・方法の改善)、第3に英語教師の使うツール類を変える(辞書・教科書、教材の改善)、そして第4に英語教師の教え方そのものを変える。具体的に説明していこう。

英語学習プロセスの解明と理解

この連載でも形態素の習得順序(本稿第6回参照)の例を紹介したが、この20年くらいの間に第2言語習得研究の分野でかなり具体的な習得段階モデルが提案されてきている。例えば、否定形(Wode 1981)、関係詞(Gass 1979)、各種の文法項目(Pienemann & Johnston 1987)、時制と相(Shirai & Andersen 1995)などである。これらの多くは個々に実証データを探ってそれをもとに理論化しているので、これらをより多くのサンプルによって収集された一般性の高い学習者コーパスで再検証してみるのも、有意義な活用法の1つである。

もっともこの際には、学習者コーパスから該当する語彙や構造をどのくらい高頻度で抽出可能かというサンプリングの問題が出てくるし、UG

(universal grammar: 普遍文法)の規則のような抽象的なルールを仮定している場合には、学習者コーパスのような通常の言語使用のデータでは限界があることがありえる。しかし、利用目的さえ明確にすれば有効にさまざまな仮説を確かめることが可能になる。

言語教育システム・方法の改善

学習者コーパスが整備されれば、何万人もの英語学習者の習得データをもとに大きな習得のプロセスが記述でき把握できるようになるだろう。その実証データは、例えば英語教員養成プログラムに利用されて英語教師志望者の訓練のために用いられよう。学習者の習得プロセスや典型的な誤りの例を事前に見ることは教師に従来と異なる言語教育観を与えるかもしれない。

また新しい指導順序や指導法の実験などを行なう際や現状の学習指導要領やシラバスの改訂の際にも、組織的に採取された大量の学習者データは重要な基礎資料となる(本稿第10回参照)。そして言語教育システム全体の改善のために有効に用いられる可能性が高い。文部省もきちんとした方法でまとまったデータを欲しいと思っているはずであるが、データ収集のやり方や集めたデータの分析方法がわからないのである。我が国の英語教育の現状に関する実証的なデータはあまりに断片的で全体像がなかなか見えない。現在の小学校への英語導入の議論はまさしくその好例のように私には思える。学習者コーパスの整備が進めばこのような行き詰まりを打破する可能性を秘めているのである。

英語教師の使うツール類の改革

英語学習者コーパスの整備は当然のことながら、既成の辞書や教科書に新しい光を当てるだろう。現在英米の英英学習辞典はほとんどが1億語以上の規模の現代英語コーパスをベースにしているが、次世代の学習辞典の特徴として彼らが真剣に検討しているのは、精選された学習者データから学習

学習者コーパスと

上のつまづきや母語の影響で間違いやすい語彙などの資料を系統的に得ることである。学習者コーパスの整備で、辞書も学習参考書も学習者のエラーや不自然な語彙の使用法について注意を喚起することが出来る(本稿第4回、9回参照)。

教科書についてもネイティブの使用語彙リストと共に学習者の表現語彙リストが整備されれば、もっと学習者のニーズに合った教科書作りが可能になる(本稿第3回)。それだけではない。学習者コーパスで導入から定着までの時間差や、項目間の難易度に関する客観的なデータが得られれば、新しいシラバスに基づくまったく新しい教科書の提案が可能なのである。

また学習者コーパスは、直接学習者に触れさせることで新しい教材としての可能性を持っている。例えば学習者自身が自分の表現したいことを他の同レベルの仲間がどのように英語で表現しているかを多数の用例で見ることが出来る。そしてそれをネイティブのコーパスで自然な英語表現と比較してみることで規則性や特徴を発見する、といった新しいタイプの学習・表現活動の可能性を持っている。また日本語と対比させた日英対訳学習者コーパスを作ることで、日常彼らが表現したい内容を日本語と英語の表現を比較対照しながら表現辞典のように利用出来たりする(本稿第8回参照)。これらをみなパソコン上で、self-access centreのような場所で行なえば、授業の運営方法や教師の役割などまで変わっていくかもしれない。

英語教師の授業実践の改善

最後に学習者コーパスは英語教師の授業実践を変えるだろう。まず教師自身が英語学習の道筋についての詳しい情報を得ることが出来るようになる。ある構文や単語をどういう風に生徒が使うのか、典型的な誤りは何か、いつ頃まで気になる間違いは続くのか、日本語にひきずられる表現は何か(本稿第7回参照)といったさまざまな疑問に対して学習者データが何百、何千と言う具体例で答えてくれる。それによって英語教師の誤りへの性急かつ否定的な対応、神経過敏だった練習の方法、

もっと重点を置くべきだった特定の語彙や表現への注意喚起など、教師が気づかなかった部分が変化していくかもしれない。そして学習者の「学ぶプロセス」を把握した教師はそうでない教師に比べて自ずと実践が変化していくに違いない。単なる教師のパフォーマンスや教える側の自己満足に終わらない、本当に「学習をサポートする指導」へと変化していった欲しい。学習者コーパスのデータは、そういった教師の目を開かせてくれる。

学習者コーパス構築の課題

学習者コーパスの可能性を大々的に述べて、なんと楽観的・単純なやつだと思っている読者諸兄のために、最後に自戒の念もこめて学習者コーパスの持つ問題点を述べておきたい。

(1) 可能性と限界の見極め

まず「学習者コーパス」という発想自体が、以前から実証データを取っている実践的な研究者にはあまりピンと来ないことが多い。なぜなら、彼らは本当に欲しいデータは自分の綿密な研究デザインの結果初めて手に入ると固く信じているからだ。これは部分的には確かに正しい。学習者コーパスは今後まだ、いかに一般的に利用価値のあるサンプリングを行なうか、学習者プロフィールなどをどう定義していくか、といった難問をクリアしていかないといけない。そしてそのうえで、よく整備された学習者コーパスから分かることと、もっとチューニングされた方法でデータを採らなければいけないものとの識別をする能力を研究者は身につけていないといけない。学習者コーパスは万能薬ではない。たとえ1億語のコーパスまで成長しても、UG-based SLAで盛んに行なわれたような subjacency research (普遍文法の原理の一部が第2言語習得でも有効かを確かめた一連の研究)の直接的な証拠を見つけるにはどうしても不向きなのである。学習者コーパスで何を調べるかという部分は使う者の見識にかかっているのである。だから学習者コーパスを礼賛する者も批判する者もその可能性と限界をよく踏まえたうえで建設的に議論しなければならない。

英語指導

……(12) 学習者コーパスの未来

words 投野由紀夫

(2) 記述と説明の両方が大切

コーパスをやり始めると途端に経験主義になって合理主義的な理論化を嫌う人がいる。逆にコーパスを懐疑的に見る人たちは「記述は出来ても説明力がない」という人が多い。このどちらもが、一定の真理を語っている。学習者コーパスで何万人もの学習者のデータを集めて、学習プロセスは $X \rightarrow Y \rightarrow Z$ です」とは記述できても、なぜ $X \rightarrow Y \rightarrow Z$ であって、 $X \rightarrow Z \rightarrow Y$ でないのか、という理由は説明できない。言語習得プロセスの説明には別途精密なモデル化が必要なのである。しかし、モデルがなければ経験的なデータは無駄なのかという点決してそうではない。多くのモデルが論議されては消えていく中で、実証データはいつまでも残るのである。であるから、学習者コーパスの提供できるものと別の次元で研究しなければならないものを見極めをきちんとつけることが大切であるし、利用するものはコーパスを見て、その現象の説明をコーパスそのものからすべて得られると思っはいけない。

(3) データ収集の難しさ

第3に、学習者データはなかなか集まらない。特に中学、高校でのデータ収集は生徒が書く量も少ないし、課題の設定もなかなか工夫が必要だ。1時間も作文に拘束することをきらい先生が大多数だから、数千人分を集めてもせいぜい十数万語くらいにしかない。一般性の高いコーパスを作るのは労多くして大変な作業なのだ。であるから、なおさら皆さんの協力なくしては出来ない。

学習者コーパス構築の共同作業を!

この連載を1年間読んでいただいた先生方は、少なくともコーパスに興味があるか、新しいこの研究分野の動向に興味がある方であろう。実は私自身も、数年前までは語彙習得や辞書学が専門で、コーパスは素人であった。しかし学習者コーパスが開くいろいろな可能性を考えるにつけ、是非データ収集やコーパス構築の技法を一から学ぶ苦勞を背負ってでもやらなければならないと考えるようになった。イギリスに武者修業で留学したのも

このためである。

同じような感想を抱かれた読者諸兄で、もし学習者データを実際に採取できるような立場におられる先生方がいらっしゃるならば、私と一緒に研究しませんか？是非、プロジェクトの詳細のために個人的に下記の電子メール・アドレスに連絡をしてください。学習者コーパスの分野はまだ未開拓なのです。実際にデータを採取する具体的な方法についてさっそくディスカッションを始めようではありませんか。そして、先ほど誓ったような夢を是非21世紀の早いうちに一緒に正夢にしましょう!

〈参考文献〉

- Gass, S. (1979) Language transfer and universal grammatical relations. *Language Learning* 29: 327-44
- Pienemann, M. and Johnston, M. (1987) Factors influencing the development of language proficiency. In D. Nunan (ed.) *Applying Second Language Research*. (Adelaide, Australia: NCRC): 45-141
- Shirai, Y. & Andersen, R. W. (1995) The acquisition of tense/aspect morphology: A prototype account. *Language*, 71: 743-62
- Wode, H. (1981) *Learning a Second Language* (Tubingen: Gunter Narr)

(とうの・ゆきお / 元東京学芸大学講師・ランカスター大学言語学科博士課程在籍: e-mail: y.tono@lancaster.ac.uk)



学習者
コーパスと
英語指導